

古代印旛の有力首長の本拠地を探る

—印播郡長隈郷の特性を中心に—

(公財)千葉県教育振興財団 木原 高弘

はじめに

千葉県北部に位置する印旛地域周辺では、昭和40年代以降、成田空港の建設などを契機に大規模な発掘調査が行われ、古代集落の全容が明らかになった例も少なくない。それらの中には古墳時代から継続する「拠点集落」が存在する一方で、奈良時代以降に「開発型集落」が現われることが明らかになっている。大規模集落の分布及び動態を大まかに見ると、印旛沼東南岸地域には「拠点集落」、西岸地域には「開発型集落」が多く分布する。また、当地域からは墨書土器など文字資料が数多く出土しており、記された人名から開発を推し進めた氏族との関係が考えられている。本報告では、印旛沼東南岸地域における古代集落などの様相から、有力首長の

本拠地と考えられる^{いんぼくんながくまこう}印播郡長隈郷の特性を探ることとしたい。

1. 地理的環境

印旛地域（四街道市を除いた成田市、佐倉市、富里市、八街市、印西市、白井市、酒々井町、栄町）に八千代市を加えた地域は、おおむね律令期の下総国印播郡及び埴生郡の郡域に相当する。その中央北東寄りには印旛沼が位置し、古代においては、現在の手賀沼・霞ヶ浦に連なる「香取の海」と呼ばれる内海の南岸の周辺地域であった。印旛沼東南岸を通る現在の国道51号周辺には、上総国から常陸国へ至る古東海道の駅路が所在し、内海を介した水路と陸路の結節点にあたる。

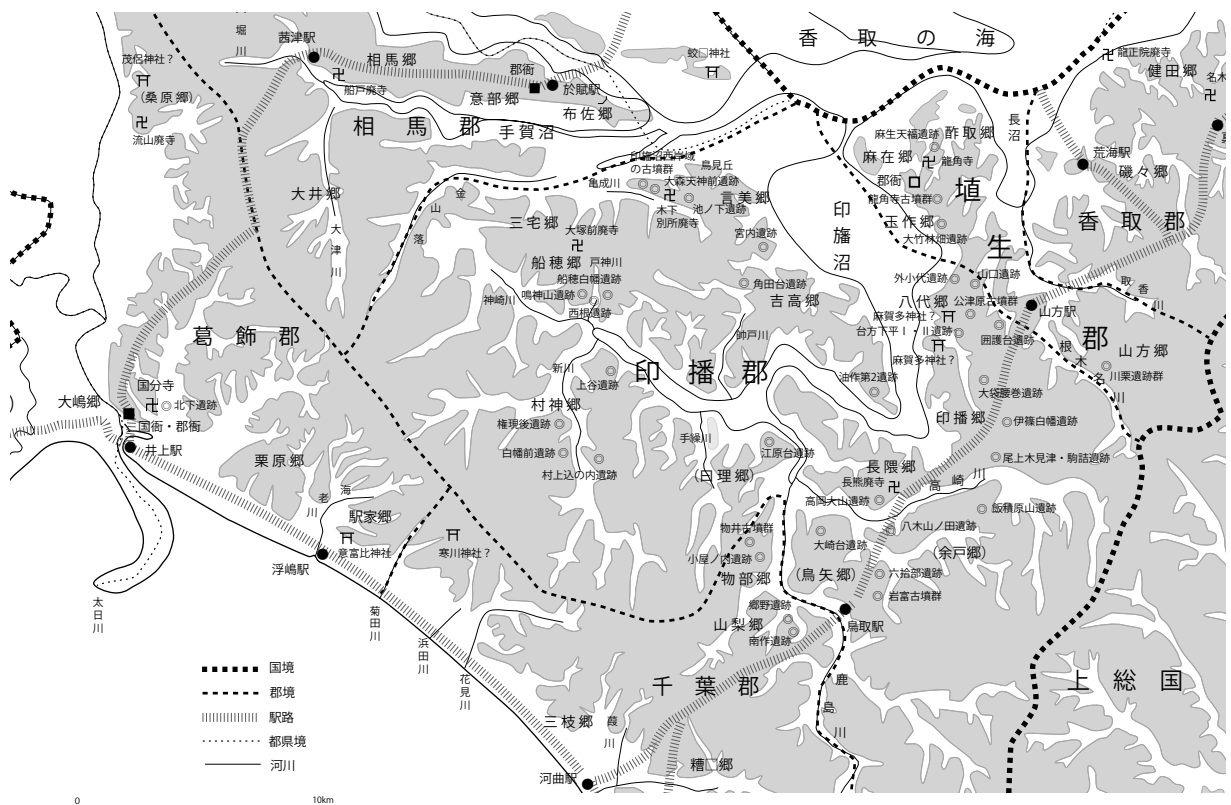


図1 印旛地域周辺図

2. 有力首長の所在と交替

この地域を統括した首長は、古墳時代から認めることができる。大化の改新以前にヤマト王権によって任命された地方首長である「国造」が記された『国造本紀』には、房総に11の「国造」が名を連ねており、そのほとんどの領域内に古墳時代後期・終末期に営まれた古墳群が所在している。「印波国造」の支配領域には、印旛沼東岸に公津原古墳群、龍角寺古墳群の2つの大規模古墳群が隣接して分布し、「印波国造」の本拠地に比定されている。南側の公津原古墳群は前期から終末期の前方後円墳8基・円墳88基・方墳32基からなり、大型の前方後円墳の築造は、後期中葉（6世紀）で収束する。北側の龍角寺古墳群は、後期から終末期の前方後円墳35基・円墳75基・方墳5基からなり、後期後半から規模を拡大し、7世紀以降、全長78mの前方後円墳の浅間山古墳、次いで国内最大級の規模を誇る一辺76～78mの方墳である岩屋古墳が造営された。このことから、「印波国造」は公津原古墳群から輩出されていたが、7世紀前葉に龍角寺古墳群に交替したと考えられている。

大化5年（649）に「印波国造」領域は、印波評と香取評の一部となり、その後白雉4年（653）に印波評を分割し、後の下総国印播郡・埴生郡が成立したとみられる。その頃に房総最古の寺院である龍角寺が建立される。龍角寺の創建期の瓦を焼成した五斗葺瓦窯からは、瓦の製作を負担した印旛沼東岸地域の地域の地名を記した文字瓦が出土している。創建期前半には、分割後の印波評（郡）域を示す「赤加」（赤坂）や香取評（郡）域を示す「加止利」（香取）など「印波国造」領域の地名が記されているが、創建期後半には龍角寺が所在する埴生評（郡）域の地名に限定される。これらのことから、龍角寺の造営主体者は交替後の「印波国造」（分割前の印波評造・評督、分割後の埴生評造・評督）と考えられる。埴生郡の郡領氏族は、平城京から出土した木簡に「左兵衛下総国埴生郡大生直野上養布十段」とあることから、「大生直」氏とされる。

平安時代中期に作られた辞書である『和名類聚抄』

には、埴生郡に4郷、印播郡に11郷の記載がある。

埴生郡の郡役所である埴生郡家は、龍角寺古墳群、龍角寺に隣接する大畑Ⅰ遺跡・向台遺跡において、7世紀後半から8世紀の掘立柱建物群や畿内産土師器、唐三彩陶枕が見つかっており、その一部と考えられている。周辺は埴生郡麻在郷に比定されるが、拠点集落の所在は明確ではない。

印播郡家は所在地未詳であるが、成田市西部の江川上流周辺（印播郷）、酒々井町の本佐倉周辺（長隈郷）が想定されている。その周辺の郷の比定地には、八代郷－台方下平Ⅰ・Ⅱ遺跡、印播郷－大袋腰巻遺跡・大袋小谷津遺跡、長隈郷－高岡大山遺跡、鳥矢郷－六崎大崎台遺跡・寺崎向原遺跡など、弥生・古墳時代から奈良・平安時代まで継続し、多くの堅穴建物、掘立柱建物が検出された大規模な拠点集落が1、2か所所在している。これらは、堅穴建物と掘立柱建物、堅穴建物のみで構成される複数の群に分かれ、施釉陶器、硯、帯金具などの威信財が多数出土する特徴を有することなどから、在地首長の居所であり、それらが核となって郷（里）が編成され成立していたことがうかがえる。

加藤貴之氏が、印播郡内の拠点集落を掘立柱建物の棟数・構成などから分析した結果、階層差を認めることができる（表1）。先行する7世紀後半では大袋山王第2遺跡が傑出しており、7世紀末から8世紀中葉までは、その移住先とみられる大袋腰巻遺跡と高岡大山遺跡（図2）が同等で上位の勢力を有する。その後、大袋腰巻遺跡は衰えるが、高岡大山遺跡は10世紀まで一貫して上位に位置付けられ、郡司層の居宅と推定されている（加藤貴 2008）。以上から、7世紀後半には印播郷の首長が勢力を有していたが、8世紀初頭頃から長隈郷の首長が台頭し、8世紀後葉までに勢力が移ったと考えられる。

“郡名”郷は、郡領氏族の拠点が中核となり、郡家を設置して郡名を冠したものとされており（平川2012），“郡名”郷である印播郷に7世紀後半から8世紀中葉まで上位の勢力を有する大袋山王第2遺跡、大袋腰巻遺跡が位置していることは、印播郷に郡家が所在することを示唆している。

高岡大山遺跡を拠点とする有力首長の優位性を示している。

同時期の印播郡の郡領氏族は、『続日本紀』天応元年（781）に「下総国印播郡大領外正六位上丈部直牛養（中略）に外従五位下を授く。軍糧を進むるを以てなり」とあることから、「丈部直」であったことを確認できる。

8世紀後葉から9世紀前葉にかけて盛行する「神」・「神奉」などと記された墨書土器は、人名が記されたものの大半が「丈部」姓であることから、印旛沼地域の丈部氏が創始した固有の祭祀によるものと考えられている（阿部 2004）。印旛沼東南岸は、その分布の中心域であり、大袋腰巻遺跡から8世紀前葉に「丈部直浄成」墨書、長隈郷域の集落からは「丈」・「直」墨書が出土していることなどから、

印播郷と長隈郷は、郡領氏族である「丈部直」の直接の支配郷であったといえよう。

3. 印播郡長隈郷における集落の様相

8世紀後葉以降に印播郡の中心的な郷となったとみられる長隈郷における集落の様相から、その特性を探ってみたい。長隈郷の比定地は、酒々井町本佐倉、佐倉市長熊・上代・白銀・大蛇町・鍋木周辺、印旛沼と高崎川に挟まれた台地と想定されている（山路 2014）。最大の郷域は、古代遺跡の分布から、高崎川中・上流域を中心に、北は印旛沼南岸及び高崎川と根木名川・江川・鹿島川との分水嶺付近、南は高崎川支流の勝田川の北岸までと推測される。現在の行政域では、印旛郡酒々井町の南部を中心に西側及び佐倉市の北東部、東側は富里市の西部に及ぶ、

表2 印播郡長隈郷域主要集落竪穴建物・掘立柱建物の変遷

番号	市・町	遺跡名	6世紀		7世紀		8世紀			9世紀			不明	主な文字資料		
1	佐倉市	鍋木淵の尾奈遺跡				1					2	2	1	「真カ」「丈カ」「野カ」		
2	佐倉市	大蛇要行寺脇遺跡								2	2			「克」「カ」「ハ」		
3	佐倉市	高岡砦跡				1			3	1	3	3	1	1(2)	「克カ」「神」	
4	佐倉市	高岡大山遺跡	14	23	25	31	27(15)	51(24)	54(29)	37(45)	63(48)	69(30)		「丈」「播」「直」「厨」「神」「神屋」「奉」「寺」 「佛」「莫」「午」「奈」「有山」「小野」		
5	佐倉市	高岡大福寺遺跡	30			1	4	8(3)	11(4)	2(1)	5	9		「除」「力」「丸」「新」「午」「生」「小野」 「廣島」		
6	佐倉市	高岡谷津遺跡									4	3		「酒」「子」		
7	佐倉市	将門鹿島台遺跡					3	2	2		2	1	2		「生」「福」「四」「口」「寺」「成」	
8	佐倉市	八木山ノ田遺跡(第2次)							1						(仏面墨書土器)	
9	佐倉市	八木蒲田谷津遺跡				1	3	3	2					2	「丈」「十」	
10	佐倉市	八木字廣遺跡				1									「神」	
11	佐倉市	下勝田台畑遺跡									3	2	1		「才」「午」「十」「骨」「正」「部」「丸女」	
12	酒々井町	北大淵遺跡								7	1	4	4	4(8)	「神屋」「奉」「八」「寺」「子申」	
13	酒々井町	上宿遺跡				2	7(1)	1		1	4(1)			4(1)	「七万」	
14	酒々井町	長勝寺脇遺跡							2	3		1		1(1)	「口」「口」「命換神奉」	
15	酒々井町	北押出し遺跡						4	4	6	2	2	2	4(18)	「丈」「丈」「奈」「直」「庄」「得」「人主」	
16	酒々井町	本佐倉外宿遺跡							3	5	5	7		(2)	「大飯」「丈」「奈」「庄」「門」「市」「口」	
17	酒々井町	南大淵遺跡									2				「中々」	
18	酒々井町	下宿栗ノ洲遺跡(第11次)					1		1	1				2		
19	酒々井町	下台遺跡	3		1	1	1									
20	酒々井町	尾上藤木遺跡	1	12	15	9	6	10	3	3	4	2	3	6(4)	「佛」「人依」「依」	
21	酒々井町	尾上柳作遺跡				1		3(2)				1		(1)		
22	酒々井町	尾上戸出遺跡						1	3	1	3	1	1		「由々」	
23	酒々井町	馬橋鷲尾奈遺跡第2地点								1			4	4	17	「神奉」「西」
24	酒々井町	飯積上台遺跡				6				1		1				
25	酒々井町	飯積原山遺跡	5							5	19(9)	21(19)	29(18)	2	「三」「三倉」「三寺」「寺」「庄」「奈野」「奈」	
26	酒々井町	墨新山遺跡						1	1	3	2	4	4	(7)	「才」「犬」「神」	
27	酒々井町	墨木戸遺跡									2	5	3(1)	(9)	「才」「神」「奈」	
28	酒々井町・富里市	尾上木見津・駒詰遺跡							2	8(6)	12(6)	13(6)			「奈野」「奈」「神奉」「神」「寺」「庄」「田人」	
29	富里市	新橋遺跡									2				「庄」	
30	富里市	新橋高松遺跡									6	2	(2)	「工」「奈野」「神」「丈」「直」「島」「仙」		
31	富里市	寺沢遺跡							1	2					「奈」	
32	富里市	郷辺田遺跡							8	2	2	3	1		「任」「丁」「苗」「得」	
33	富里市	中ノ台遺跡									3	3			「任」「厨」「中」	
34	富里市	滝台遺跡							1	1			2		「任」	
35	富里市	塚越遺跡							3(1)	4	3(1)		1		「丈部神奉」「寺」	
36	富里市	稲荷谷津遺跡		7	10											
37	富里市	郷山遺跡								1					「足」	
38	富里市	中沢野馬木戸遺跡							3	3	3				「済」「庄」「占」「寶カ」	
39	富里市	天神谷津遺跡									1					

()は掘立柱建物跡の数

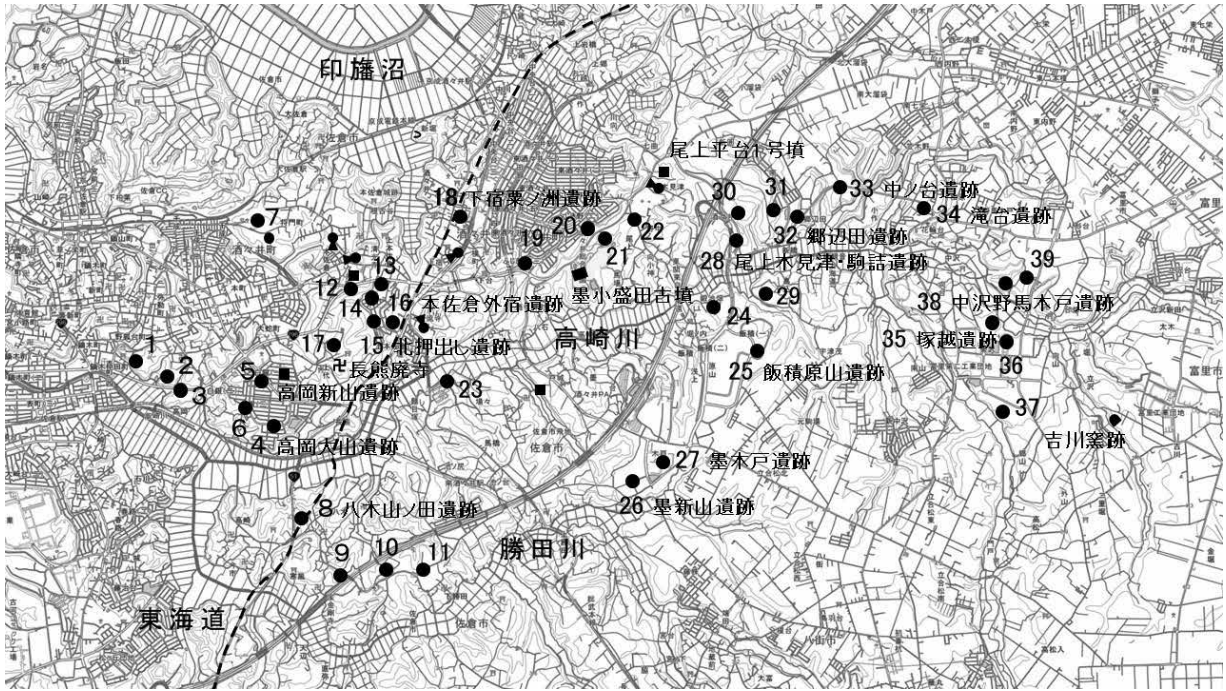


図3 印播郡長隈郷主要集落・古墳分布

およそ東西11km、南北4kmの範囲である(図3)。

高岡大山遺跡以外の集落は、中・小規模で、長期に継続するものではなく、大きな移動の画期が2回みられる。古墳時代前期から後期初頭(6世紀前葉)は、集落・古墳が高崎川中流兩岸の台地縁辺・段丘面に営まれる。

第1の画期は、6世紀中葉で、印旛沼南岸東側の尾上周辺に9世紀中葉まで継続する集落が現れる。印旛沼低地の開発のために高崎川側から移動・進出したものとみられる。周辺には、比較的大型の30×23mの長方墳である墨小盛田古墳や一辺30mの方墳である尾上プラットフォーム1号墳などの終末期古墳が点在する。印旛沼南岸西側の本佐倉周辺は、6・7世紀は主に墓域であるが、印旛沼東岸のような大規模な群集墳は形成されず、大型の前方後円墳もみられない。継続的に集落が営まれるのは、8世紀初頭以降である。

第2の画期は、8世紀中・後葉で、高崎川中・上流兩岸の台地上に集落が現われる。9世紀中葉に集落の分布域は最大となるが、9世紀後葉まで継続する集落は少なく、10世紀以降は、高岡大山遺跡、高岡大福寺遺跡のみとなる。

勝田川北岸は、下流域では7世紀中葉から8世紀

中葉の集落、上流域では8世紀前葉から9世紀中・後葉にかけて集落が営まれている。

高岡遺跡群以外にまとまった範囲が発掘調査された集落は、第2の画期である8世紀中・後葉以降に出現した「開発型集落」が多く、特殊な性格をもつものが見つまっていることから、それらを中心に高崎川中流域、高崎川上流域、勝田川北岸域の3つの区域に分けて様相をみていく。

(1) 高崎川中流域

ア 尾上木見津・駒詰遺跡(図4)

高崎川北岸に位置する。8世紀中葉から9世紀中葉(I~IV期)の竪穴建物35棟、掘立柱建物18棟、土坑墓24基、円丘祭祀跡が検出された。遺物は多くの威信財が出土している。

竪穴建物群は、高崎川に近い南側と台地の北東側を中心に分布する北側の2群に大きく分かれる。同じ台地の北東側に位置する新橋高松遺跡から検出された9世紀第2・第3四半期の竪穴建物8棟、掘立柱建物2棟は、北側の群の一部をなすものである。

II期(8世紀末から9世紀初頭)以降、南側の竪穴建物群の東側に広場を挟み、掘立柱建物が「L」字状に配置される。西側に廂が付く5間×3間の主

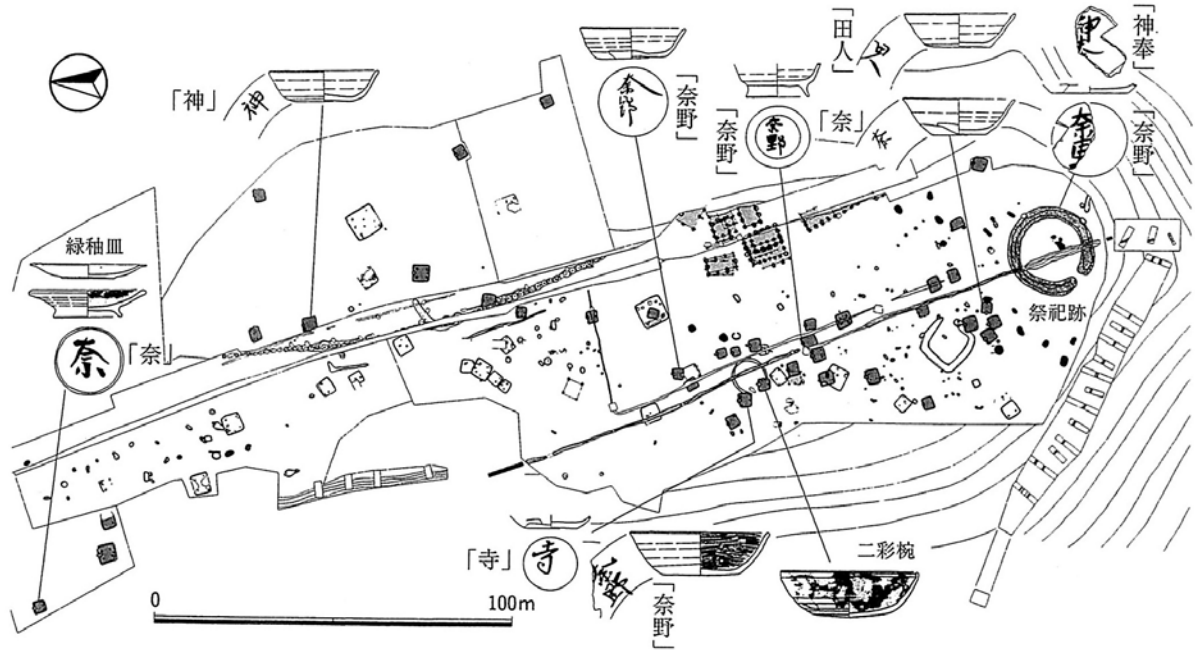


図4 尾上木見津・駒詰遺跡

屋を中心に南側に4間×2間2棟、北側に3間×2間の南北棟1棟、北東側に3間×2間2棟の合計6棟で構成される。IV期（9世紀第2四半期から第3四半期前後）の主屋は、無廂の4間×3間に縮小する。この建物群は竪穴建物を含まないのが特徴である。

台地南端では、II期以降に5世紀代の円墳を利用した祭祀が行われ、周溝から火焚きを行った跡とみられる焼土、大量の墨書土器、鉄製鋤先・鎌、帯金具などが出土した。類似する円丘祭祀跡は、上総国府域に所在する市原市稲荷台遺跡で見ついている。

遺物は、神功開寶、完形の二彩陶器碗、三彩陶枕、京都産緑釉陶器片23点が特筆される。墨書は、新橋高松遺跡も含め、「奈野」・「奈」・「庄」・「丈」・「直」・「神」・「神奉」・「神坏」・「田人」・「寺」・「寶」・「富」・「宇」などが出土している。大半を占める中心的な文字である「奈」・「奈野」はII期以降に出土し、寺沢遺跡、飯積原山遺跡、北押出し遺跡、本佐倉外宿遺跡、高岡大山遺跡、墨木戸遺跡からも出土している。高崎川中流域におけるつながりのある集団を表す文字であり、本遺跡はその中心的な集落とみなされる。

片廂の桁行5間規模の主屋を含む掘立柱建物のみ

からなる「L」字状の配置の建物群は、初期荘園の管理施設である庄所建物群の定型的な構成とされており（吉岡 1993）、施釉陶器類の出土、威信財を供する円丘祭祀は中央の寺社、王臣家、国衙などとの関わりが想定される。

以上から、本遺跡は、後述する飯積原山遺跡、北押出し遺跡・本佐倉外宿遺跡とともに高崎川中流域において展開した初期荘園の中核的・統括的な開発・経営拠点と捉えることができよう。

イ 飯積原山遺跡（図5）

高崎川南岸の台地上、尾上木見津・駒詰遺跡の対岸に位置する。台地北側に8世紀第4四半期から9世紀第3四半期の竪穴建物76棟、掘立柱建物46棟、東西方向に長い約1町（109m）×30歩（54m）の方格風の区画溝が検出された。遺物は若干の帯金具、転用硯が出土しているが、威信財と呼べるものは少ない。

竪穴建物群は、1期（8世紀第4四半期）は5棟からなる。墨書は「三」・「奈野」・「夫」が出土している。「三」は本遺跡の中心的な文字である。「奈野」により、尾上木見津・駒詰遺跡が拠点となり、開発が開始されたことが想定される。2期（9世紀第

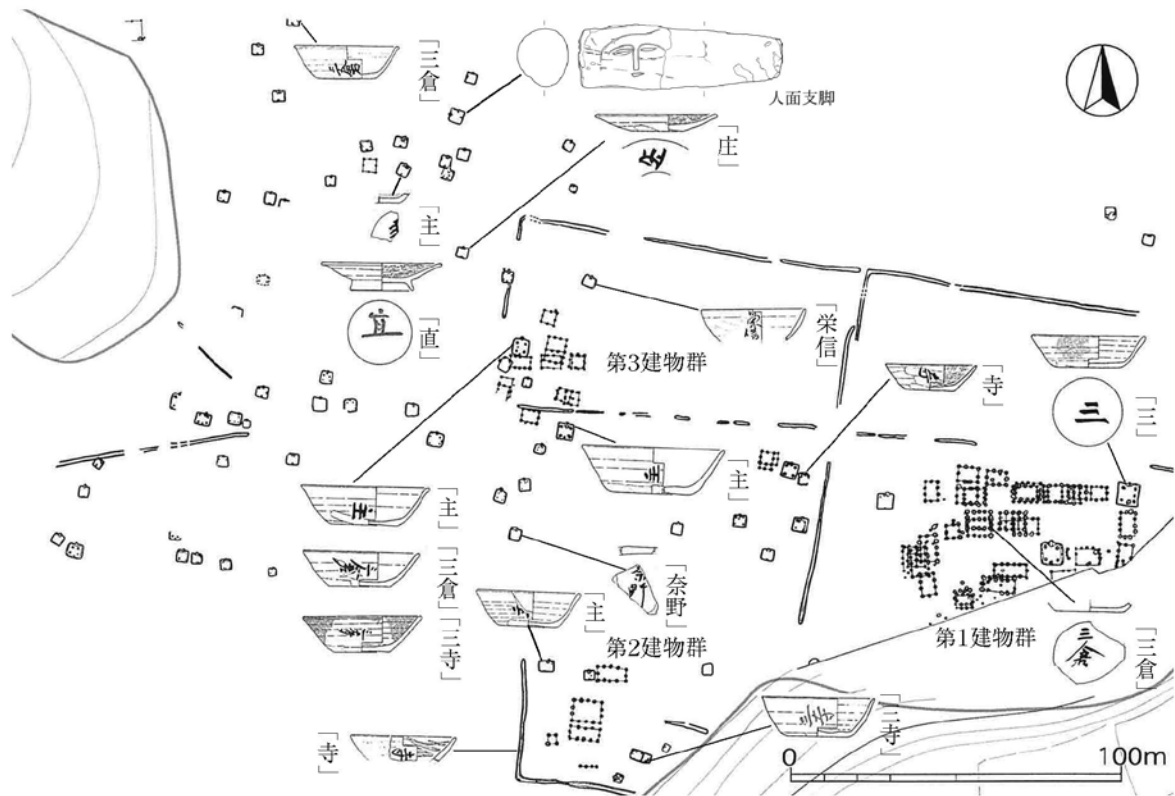


図5 飯積原山遺跡(主要部)

1 四半期) 以降は 15 棟以上に増加し、高崎川に通じる西側の谷津頭を中心として環状ないし馬蹄形に分布する。

第1建物群(庄所)は、2期以降に台地東端の区画に設置される。2期は側柱建物9棟、竈屋かまどやとみられる大型の竪穴建物1棟が正方位基調の「口」字状に配置される。西側に東面する4間×2間の主屋、副屋、脇屋2棟が「コ」字状に配置される。北西側にはえいや額屋2棟、南側には長屋、馬小屋ほかを配置する。3期(9世紀第2四半期)は、掘立柱建物11棟、竪穴建物1棟に増加する。4期(9世紀第3四半期)は、床東建物の主屋を中心に掘立柱建物10棟、竪穴建物1棟が横長の南面する「コ」字状に配置される。墨書は「三倉」が集中して出土しており、遺跡全体から最も多い約95点が出土している。「三倉」は、「御倉」のことであり、第1建物群を表しているとみられる。官衙的な配置をなし、越前国東大寺領道守莊ちもりのしょうの莊園絵図に描かれた庄所、同桑原莊の復元された庄所の建物群に類似していること、「庄」墨書が2期以降に出土していることなどから、初期

莊園の管理施設である庄所と判断される。

第2建物群(寺院)は、3期に南側の台地縁辺に造営される。「L」字状の溝の内側に掘立柱建物4棟(双堂建物、僧房、倉)、竪穴建物3棟(竈屋、鍛冶ほかの工房など)が分布し、掘立柱建物は、僧坊以外は4期に継続する。墨書は「寺」・「三寺」・「三倉」・「主」が出土しており、後述する第3建物群(居宅)からも「主」・「三寺」の墨書が出土していることから、第3建物群の有力農民が主体的に造営に関わったと思われる。

第3建物群(居宅)は、竪穴建物群の東辺に位置する。2期は竪穴建物2棟で構成されるが、3期は、4間×3間の主屋ほかの掘立柱建物4棟、竪穴建物2棟が中庭を取り囲んで「口」字状に配置される。「主」墨書が集中して出土しており、第3建物群の性格を示唆する文字である。4期は、掘立柱建物6棟、竪穴建物1棟が南面する「コ」字状の配置となる。2期の竪穴建物2棟から継続することから考えると、階層分化の進行から生じた有力農民の居宅であり、鉄製農具の保有状況などからみて、周辺の竪



図6 北押し遺跡・本佐倉外宿遺跡

穴住居群の農民を組織・統制していたことが想定される。

上記のほかに注目される墨書は、第3建物群の北西側に位置する3期の竪穴建物から、朱墨で記された「直」が「主」とともに出土しており、第3建物群の有力農民と「丈部直」との繋がりを示すものと考えられる。また、第3建物群の北側の2期の竪穴建物から出土した「栄信」は、僧侶の名であり、寺院が造営される以前から僧侶が活動していたことが分かる。

本遺跡は、尾上木見津・駒詰遺跡が開発拠点となり、「丈部直」の主導のもとに営まれた初期荘園の分散的な経営拠点と捉えることができよう。

ウ 北押し遺跡・本佐倉外宿遺跡 (図6)

高崎川北岸に位置する一連の集落である。西側の北押し遺跡では、8世紀第2四半期から9世紀第3四半期の竪穴建物24棟、掘立柱建物18棟が検出された。掘立柱建物は東西方向に長い「口」ないし「コ」字状に配置されている。2、3時期に区分され、

9世紀前葉は、西側に4間×3間の南北棟の主屋と東西棟の側柱建物が東に開いた「コ」字状に配置される。

9世紀中葉は、5間×3間の主屋のほか、4間×3間の東西棟が二列に配され、大型の竪穴建物も伴う。飯積原山遺跡の第1建物群とよく似た配置の建物群で、庄所の建物群とみられる。

東側の本佐倉外宿遺跡からは、8世紀第3四半期から9世紀第2四半期の竪穴建物20棟、掘立柱建物2棟が検出されている。飯積原山遺跡の竪穴建物群に対応するものであろう。

墨書は、「大飯」・「丈」・「奈」・「直」・「庄」・「得」・「京」・「富」・「人主」・「告」・「前」・「門」・「市□」など、威信財は帯金具、転用硯が出土している。

本遺跡は、竪穴建物を主体に8世紀中葉から集落が形成されるが、「奈」・「庄」の墨書が現れる9世紀以降に庄所の建物群が設置され、飯積原山遺跡と同様な尾上木見津・駒詰遺跡の周辺における初期荘園の経営拠点となったと思われる。

(2) 高崎川上流域

ア 塚越遺跡

高崎川南岸に位置する。8世紀第4四半期から9世紀第2四半期の竪穴建物11棟、3間×2間の四面廂をもつ掘立柱建物などが検出されている。周辺の竪穴建物から「寺」墨書が出土しており、寺院である可能性が高い。ほかに墨書は「丈部神奉」などが出土している。南東側に隣接する稲荷谷津遺跡では、6世紀後葉から7世紀前葉の集落がみつかり、周辺は古墳時代から丈部氏により開発されてきたとみられる。

イ 郷辺田遺跡、中ノ台遺跡、滝台遺跡

高崎川北岸の支谷に開折された南北方向に長い連続する台地上に位置する。いずれも台地を横断する路線幅の調査であり、8世紀第4四半期から9世紀第3四半期の竪穴建物が合計26棟検出されている。墨書は「任」が各遺跡にみられるほか、「厨」・「丁カ」・「得カ」・「苗」・「四」・「九」・「中」などが出土している。「任」は印播郡内では、印西市船尾白幡遺跡、同鳴神山遺跡ほかからも出土している。船尾白幡遺跡は埴生郡から進出した「大生部直」の開発拠点と考えられている(栗田 2015)。この周辺は、埴生郡に近いことから、「大生部直」が一带の開発を行っていた可能性がある。

ウ 中沢野馬木戸遺跡

高崎川北岸に位置する。数次にわたり部分的な調査が行われ、8世紀第4四半期から9世紀第2四半期の竪穴建物9棟などが検出されている。墨書は「済」が9世紀第2四半期の竪穴建物2棟から出土しており、本遺跡を特徴づける文字である。ほかに「庄」・「占□」が出土しており、高崎川中流域とは開発・経営主体が異なる初期荘園が展開していた可能性がある。

エ 吉川窯跡

高崎川支流の東岸に位置する。8世紀第4四半期の須恵器窯が1基調査されている。現時点で印播郡

最古の須恵器窯である。単発的な操業と思われるが、出土した須恵器は常陸国南部の新治窯産須恵器と製作技法等が類似しており、その技術が導入されたとみられる。近年、さらに上流の北岸域において須恵器窯の所在が想定される遺跡が数か所見つかり、窯跡群が形成されている可能性がある。

(3) 勝田川北岸域

ア 墨新山遺跡・墨木戸遺跡(図7)

勝田川上流北岸に位置する一連の集落である。下流側の墨新山遺跡からは、8世紀第1四半期から9世紀第2四半期の竪穴建物15棟、掘立柱建物7棟、上流側の墨木戸遺跡からは、9世紀第1四半期から第3四半期にかけての竪穴建物10棟、掘立柱建物10棟が検出されている。

墨新山遺跡からは、焚口に対して煙道が壁に沿ってT字状に屈曲するカマドが敷設された8世紀第

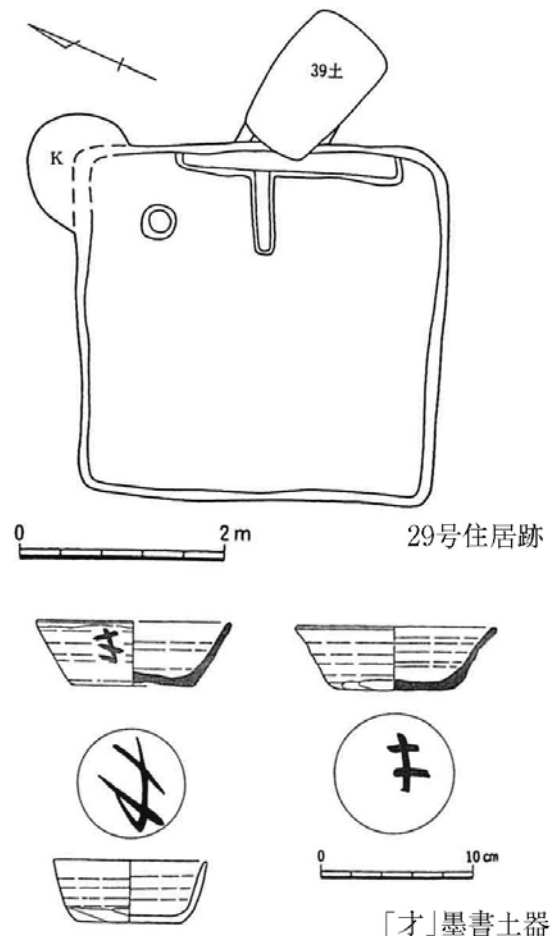


図7 墨新山遺跡

2 四半期の竪穴建物（29 号住居跡）が検出されており、オンドル状遺構の可能性が高い。同建物からは内面に漆布が付着した土器器坏が出土している。

墨書は「才」が8世紀第3四半期以降に継続して出土している。『日本書紀』雄略天皇七年是歳条の記事にある「新たに百済から献上された今来才伎」の「才伎」は、諸種の技術を持つ工人のことであり、「才」は渡来系の人々を中心とする工人・技術者集団を象徴する文字表記と理解されている。下総国府に近い葛飾郡栗原郷域に位置する船橋市印内台遺跡群第11次では、9世紀中葉の漆紙が付着した「才」墨書土器が出土しており、国府工房における漆塗工人との関連が想定されている（平川 2017）。甲斐国府・国分寺周辺の遺跡においても「今」・「才」の文字資料が出土している（平野 2016）。地方では、陸奥国会津郡衙周辺の遺跡において「梓□今来」・「今」の文字資料が出土しており、「秦氏」に比定される渡来系集団が居住したと考えられている（菅原 2024）。

4. 長隈郷の特性について

長隈郷が印播郡の郡領氏族である「丈部直」の支配郷であることと、域内の集落の様相との関係について考えてみたい。

高崎川中流域では、「奈」・「奈野」の墨書に象徴される所有者が同一とみられる初期荘園の経営拠点の性格をもつ集落が複数配置されていた。このことは庄田が分割経営されたことを示している。文献史料では本地域における初期荘園を確認することができないが、中枢的・統括的な経営拠点である尾上木見津・駒詰遺跡から出土した多くの威信財、祭祀のあり方などからみて、中央の寺社、王臣家、国衙によるものと思われる。

同様な事例として、越前国東大寺領横江荘では、倉庫院・管理棟・仏教施設からなる荘園の中枢部の周辺に、東庄・西庄・南庄・北庄の4か所の経営拠点が配置されている。宇野隆夫氏は経営に郡領氏族が関与し、9世紀に発展する有力寺社主導2型の代表例とし、中枢部は中央・宮都との関わりが深く、

周辺の庄所は在地首長が主導、その外縁には郡領級有力首長の本貫地・居所が位置する景観を想定している（宇野 2001）。高崎川中流域に展開した初期荘園のあり方によく似ているといえる。

初期荘園の経営構造は、荘園内に独自の庄民を有さず、在地首長の協力のもとに周辺の班田農民に労働力を依存する北陸型荘園と荘園所有者自らが労働力を編成・組織する畿内型荘園に類型化されている（小口・吉田 1991）。本地域では、いずれの経営拠点の集落にも竪穴建物群が形成されていることから、直属の庄民を有していたように見えるが、「丈」・「直」・「神」・「神奉」などの墨書の出土により、「丈部直」の関与や周辺農民の移住によるものであることをうかがうことができ、北陸型荘園に類するものとする。北陸型荘園の経営を実現するためには、国・郡の行政機構の利用、とくに労働力の確保に有力首長＝郡領層の協力が不可欠であることから、安定した経営を行うため、郡領層が支配する長隈郷域内に初期荘園が営まれたと考えられる。

高崎川上流域は、主に8世紀後葉以降に開発が及び、「丈部直」だけでなく、他地域の集団により開発されたことが推測される。特に「任」墨書が継続的に出土した北岸地域は、隣接する埴生郡の「大生部直」により開発が行われた可能性がある。

集落域よりさらに上流では、須恵器生産が行われていた。常陸国南部の新治窯から技術導入が図られており、同窯跡群から供給された長熊廃寺の補修期の所用瓦とともに協力ないし援助があったことがうかがえる。須恵器生産は、おおむね一郡一窯跡群への指向を帯びることから、生産と交易を掌握したのは郡領層に代表される地域の伝統的な支配勢力と考えられており（浅香 1971）、印播郡においては、その本拠地において生産が行われたことが分かる。

勝田川北岸域では、「才」墨書に表象される渡来系の集団による集落が8世紀初頭から継続して営まれていた。手工業を始めとする先進技術を持つ渡来人は、地域の開発などに資する人材として活用され、とくにこの時期に国家の政策的意図によって強制的な移住が行われている。従来は国府近くの郷の拠点

集落に移配され、手工業に従事するものと考えられてきたが、地方においても、開発を主導する郡領層・有力首長のもとに移配されたと考えられる。

3でみた集落分布の大きな変動は、地域開発に伴い移住が行われたことによるものであり、在地首長の支配力の大きさを物語るものである。各遺跡を見ると、初期荘園、他地域の集団による郷内の開発、渡来系集団の集落群、須恵器窯など特殊な性格をもつものが認められた。これらは郷単位では成しえない、律令国家一国一郡レベルの動きの中で行われたものであり、長隈郷が郡領氏族である「丈部直」の本拠地であり、直接の支配郷であったことが関係しているとみることができよう。

引用・参考文献

- ・浅香年木 1971『日本古代手工業史の研究』法政大学出版局
- ・阿部寿彦 2004「神へのまつりと祓いの流行」『千葉県の歴史 資料編 考古4（遺跡・遺構・遺物）』千葉県
- ・宇野隆夫 2001『荘園の考古学』青木書店
- ・小口雅史・吉田 孝 1991「律令国家と荘園」『講座荘園史』2 吉川弘文社
- ・加藤貴之 2008「古代印幡郡における掘立柱建物群の様相―掘立柱建物群の構成から見た居宅・郷家―」『研究紀要』6 印幡郡市文化財センター
- ・加藤有花 2008「高正寺出土遺物の検討―北総地域における雲母を含む古瓦―」『研究紀要』6 印幡郡市文化財センター
- ・木原高弘 2023「千葉県酒々井町飯積原山遺跡の集落構造と性格」『古代集落の構造と変遷』3 奈良文化財研究所
- ・栗田則久 2015「古代印幡郡船穂郷の開発」『研究連絡誌』第76号 千葉県教育振興財団
- ・白井久美子 2016『最後の前方後円墳 龍角寺浅間山古墳』新泉社
- ・菅原祥夫 2024『古代国家と東北境界領域の考古学』同成社
- ・千葉県史料研究財団編 2001『千葉県の歴史 通史編 古代2』千葉県
- ・仁藤敦史ほか 2020「特集・2019 古代史サマーセミナー 古代の郡と郷をさぐる―下総国印幡の事例を中心に―」『千葉史学』第76号 千葉歴史学会
- ・平川 南 2012「古代の郡家と里・郷」『国立歴史民俗博物館研究報告』第178集 国立歴史民俗博物館
- ・平川 南 2017「船橋市印内台遺跡群出土文字資料」『印内台遺跡群第11次』船橋市遺跡調査会
- ・平野 修 2016「考古学からみた渡来人と俘囚（ふしゅう）の遺構と遺物」『古代東国の渡来人を考える』積石塚・渡来人研究会
- ・山路直充 2014「下総国の郡・郷・里・駅家」『下総国戸籍 遺跡編』市川市文化振興課
- ・吉岡康暢 1993「北陸初期荘園遺跡の考古学的検討」『東大寺領横江庄遺跡』松任市教育委員会・石川考古学研究会